IMOUTO
妹とラブる！
TO LOVE RU!
小説 高岡智空
挿絵 章上明
立ち読み版

第一章　雪をも溶かすような妹の愛　006
第二章　月も恥じらうような妹の性癖　067
第三章　雪のように積もる想い、月のように輝く笑顔　120
第四章　吹雪と満月　168
第五章　両手に花　207
エピローグ　太陽のように、明るく大きな想い　252

登場人物紹介

Characters

宝條雪花（ほうじょうゆきか）

二人の妹のうち上の妹。お兄ちゃんっ、とくっついてきては無邪気な笑みを見せる。お勉強もできて成績優秀。

宝條月花（ほうじょうつきか）

二人の妹のうち下の妹。クール＆凛とした雰囲気で、直希との間には温度差も？？　バスケ部ではエース。

宝條直希（ほうじょうなおき）

非モテ男子。周囲の友人達が恋人を作っていくことに乗り遅れまいと必死。

（雪花のお尻……それに、脚も……スベスベで、気持ちいい……）

「はぁんっ！　あぅっ、んふぅぅっ……ふぁっ、あっ、触って……んんっっ！」

ショートパンツの留め金を外しているのは、彼女のクセのようなものだった。軽く引っ張るだけでファスナーが下り、ショーツ越しのヒップに手が届いてしまう。

（雪花も言ってるし、いいよな……こ、こんな感じか……？）

さすがに片手には溢れるが、それでも十分小さくて、愛らしい丸みを帯びた感触が手の中に広がる。指を動かすと、簡単に尻肉がたゆんで食い込み、密着してくる彼女の肢体が何度も、ビクビクンッと小刻みに跳ね上がった。

「んはぁぁっっ！　んっふ、うぅんっ……お兄ちゃん、大胆……気持ちいいよっ♪」

嬉しそうに、そして気持ちよさそうに声を高くして、雪花の腕が絡みついてくる。そんな反応に劣情はますます高まり、剥きだしの太ももからスベスベの肌触りを味わうのを、やめることができなかった。恐る恐る触れていた手をさらに激しく動かし、お尻と太ももの柔肉を揉みしだき、捏ねるように手の平全体で愛撫する。

「っっ……ゆ、雪花っ……雪花！　可愛いぞ、雪花ぁ……んっ、ちゅむぅ……」

拙い手つきにも拘わらず、こちらが嬉しくなるような反応を見せる妹がいじらしくて、気がつくと直希は、彼女が喜ぶと言っていた言葉をささやいていた。

「はふぅっ……お兄ちゃん、あたし……んはぁっ、あむっ……んじゅっ、ちゅばっ……」

熱い吐息をもらして寄せられる唇を強引に奪い、舌を絡めてゆく。耳を食んでいるとき

から大量に溜まっていたのか、唇を割り開いた瞬間にドッと唾液の奔流が流れ込んで、味覚いっぱいに彼女の味が広がってきた。

（はぁっ、はぁ……んっ、こんなに甘いっ……雪花の唇、柔らかくて……）

もっともっととせがむように舌を蠢かせ、口内を蹂躙すると、妹の鼻息は興奮に荒くなり、強く唇が押しつけられる。ピチャピチャと舌が絡みつき、接合部から唾液が溢れて、ポタポタと互いの服を汚すのを感じたが、まるで気にならない。彼女は腰をくねらせながら股間をペニスに押しつけ、その刺激を味わいながら直希は両手でお尻と脚を堪能し、唇で舌を吸い上げてゆく。

「あぐっ、んむぅっっ……ぢゅるっ、ちゅばっ、はむぅっ……んぐっ、じゅるっ……」

「ふぁっ、んぁぁっ……おに、ぃ、ひゃぁんっ……あむちゅっ、ちゅぱっ……」

マズい――とわかっているのに、口づけを重ねるたびに、彼女への愛しさが数倍にも膨れ上がってくる。自分を気持ちよくさせようと腰を動かす姿、舌を動かすと従順に受け止めて応じてくれる健気さ、手と口の感触に嬌声を響かせる艶めかしさ、すべてが可愛らしくて、彼女が本物の恋人だと錯覚してしまいそうなほどだった。

「んぅっ……ぷぁっ、あはぁぁ……んふふっ、してくれるんだね、お兄ちゃん……」

はにかんだ雪花の笑みに、ドクンッと心が跳ねた。その顔は保護欲をくすぐるだけではなく、潤んだ瞳と紅潮した頬に、艶めかしい女性の色香を漂わせている。

（雪花……お前は、大切な妹なんだ……だから……）

迷っているわけではない、すでに身体は彼女を求めて臨戦状態にあるし、雪花だってここで押し倒されても泣き叫ぶようなことはないだろう。ただ、それでこの少女が、後悔することはないのか――それだけが気にかかり、彼女の問いへの返事を躊躇わせる。

「……まだ決心してくれないの、お兄ちゃん……？」

「っ！　いや、そうじゃない、雪花……ただ、俺は――んぅっ！」

唇を塞がれ、言葉を遮られる。ねっとりと唇を舐め上げられ、なにを言おうとしたのかも忘れかけたころ、ゆっくりと唇が離れ、唾液の粒がポタポタと滴り落ちた。

「んはぁぁ……ふふっ、大丈夫だよ、お兄ちゃん。あたしはお兄ちゃんのことが好きだし、お兄ちゃんに初めてをもらって欲しいの……そうすれば、いつでもお兄ちゃんのこと想っていられそうだから……ね、お願い……」

胸板に寄りかかり、上目遣いで雪花が見つめてくる。細い唇が唾液で光り、僅かにでも顔を近づければ口づけてしまえる、そんな距離で直希を誘っていた。いじらしい想いを告げる妹が愛しくてたまらず、脚から離した手を頭に添えて、ゆっくりと抱き締める。

（……バカだな、俺は……これだけされてるくせに悩むなんて、どうかしてる……）

問題は色々とある、けれどいまはそれらをすべて忘れたかった。自分を思ってくれる彼女をしっかりと受け入れ、愛してあげたいと切に思う。白い首筋に口づけ、髪を梳き、どれだけ妹を想っているかを行動で伝えながら――覚悟を決めた直希の手はゆっくりとショートパンツに伸び、細い脚を通してスルリと脱がし下ろしていた。

「ひゃうんっ……ふぁ、あんっ……えへへ、嬉しい。お兄ちゃん……彼女さんができたときの練習だと思って、好きにしていいからね？」

（えっ……雪花、お前……ったく！　なに言ってんだ、そんなわけっ……）

思わぬ言葉にドキリとさせられ、それと同時にショックを覚える。

もしかして――雪花は自分がして欲しいと望んだから、兄はそのつもりがなくても自分を憐れんで、エッチする気になったのだと思ってしまったのだろうか。少し寂しそうな彼女の声音にそんな気配を感じ、直希はキュッと唇を引き締めた。

（そんなんじゃないっての……俺は……）

だがそう思わせたのだとしたら、それはいつまでも悩んでみせた自分の責任だ。だから直希は首を振って、それを真正面から否定してやる。

「っっ……バカっ、そんなことできるわけないだろうがっ……」

「えっ……きゃんっっ！　あっ、お……おにい、ちゃ……んむぅっ!?」

か細い身体はやはり軽く、簡単にソファの上へ押し倒すことができた。もちろん、彼女を傷つけないよう抱き留めて、ゆっくりと寝かせるようにしてのことだが。

直希がそんな攻勢に出るとは想像もしていなかったのだろう。驚きに声をもらしたその口にキスをして、柔らかい髪を根元から梳き、落ち着かせるように頭を撫でる。

「んぐじゅっ、ちゅぶっ、じゅるぅぅ……んっ、はぁ……練習なんて、思うわけないだろ……可愛い妹の初めてなんだ。いまのお前は、俺の彼女だっての……」

「――っっ!! あっ、お……お兄ちゃ……んっ、うぐっ、うぅぅ……嬉しいっ、お兄ちゃんっっ……大好きっ♥」

首に彼女の両腕が回され、濃厚な口づけとともに甘い吐息が注がれる。互いの唇と舌を啄み合いながら彼女の腰を浮かせると、ショートパンツの奥にこもっていた汗の臭いと、甘酸っぱい女の匂いがムワァァ……と広がり、直希の下半身を刺激してくる。

（うぉっ……すっげ、これ……雪花の、アソコの……っっ！）

昂ぶっているのは自分だけかと思っていたが、雪花の身体もかなり火照っていたというのがよくわかった。

「さ、触るからな……痛かったら言えよ、いいな？」

剥きだしになった淡いピンクのショーツにそっと手を這わせてみると、濡れた布地に指先がグチュリと埋まり、染みだした粘液が絡みついてくる、刹那――。

「はふぅぅんっっ♥ んっ、やっ、あぁぁ……は、恥ずかしい、お兄ちゃんっ……」

ビクンッと背中を跳ねさせて腰を震わせ、弛緩したように四肢を脱力させた雪花が、ソファに倒れ込んだ。両手で覆った顔は真っ赤に染まり、身体中にしっとりと汗を浮かべた彼女は剥きだしの脚を内股にし、直希の手を止めようとしているようだった。

（……やっぱい、雪花のやつ可愛すぎるっ……）

ここまで積極的だった雪花が不意に見せた羞恥心に、ゾクゾクと背筋がわななく。倒れた彼女を追ってその上にのしかかり、ショーツの奥を先ほどより強く、けれど彼女の身体

をなによりも思いやって指で押し込みながら、耳元に口づけてささやいた。
「濡れてるよな、いつからこんなになってたんだ？」
「はぁうっっ……んぅっ、はぁぁ……も、もうっ、お兄ちゃんってば……そんなこと、聞かないで……くひぅっっ！」
染みだした愛液の滲みを広げるように、今度は秘部の中心に指先で円を描く。先ほど自分がされたように、耳朶に舌を這わせて舐め擦ってやると、すぐさま甲高い嬌声が響き、彼女が腰を捩るたびに身体から甘い香りが広がってゆく。
「っと、悪い……ほら、軽く腰上げてもらえるか？」
なにからなにまで初めてなのは、お互い様だ。直希が緊張しながら声をかけると、微かに微笑んで雪花もぎこちなく腰を上げてくれる。だがその瞬間、スゥッと濡れた肌を空気が撫で上げたのだろう。不意に彼女の頬が、桃色に染まっていった。
「ふぅっ、んっ、うん……んぁっ、やぁっ……あぅ、パンツまでこんなに……」
恥ずかしがる彼女を慰めるように頭を撫でつつ、お尻を優しく刺激しながら、ショーツを引きずり下ろす。縁に手をかけるだけで湿った感触が手を伝い、股間に張りついた布地が剥がれるたびに、クチュ、ニチュゥ……と淫らな音が奏でられた。
そのまま濡れた布地をクルクルと巻くようにして、脚から引き抜いてゆく。膝を立たせた両脚の間に座り、その部分を優しく指でなぞって左右に開かせた。
（こ、これが……雪花の、オマ〇コっ……）

すでに太ももまでベトベトに濡れるほど溢れた愛液で、触れただけの手の平がぐしょぐしょになってしまう。そんな自身の惨状が自分でもわかるのだろう、雪花は真っ赤になって両腕で顔を隠し、さらに強く脚に力を込めて、その部分を隠そうとしていた。

「恥ずかしいのはわかるけど、もう少し力抜かないとできないぞ……やめるか？」

「っっ……や、やだ！　して、欲しいよぉ……」

ビクンッと跳ねた身体から、僅かに力が抜ける。その隙を突いて脚を左右に押し開くと、ようやく観念したように、彼女が大股を開く格好でそこに横たわった。

「んっ、み……見て、ください……お兄ちゃん……っっ♥」

（〜〜〜〜〜〜っっっっ、かっわい、すぎるってのっっ……）

羞恥をこらえて、それでも続けて欲しいからとおねだりする妹の姿が、愛らしくてたまらない。それほどまでに自分にして欲しいのかと思うと、その従順さと健気さにますます興奮させられ、肉棒がビクビクッと下着の中で躍動した。

「あぁ、しっかり見てやる……いい子だな、雪花……」

「ひぅんっっ……んっ、嬉しい、お兄ちゃん……好きっ、好きぃ……♥」

太ももを撫でながら力を込めると、腰をくねらせて彼女が羞恥に悶える。その脚の間に顔を埋めると、穢（けが）れない少女の淫靡な谷間が、視界いっぱいに飛び込んできた。

（うぉぉっ、わっ……すげぇ、こんな……エロいのに、めちゃくちゃ綺麗だっ……）

秘部の恥毛は薄く、その奥に隠れているはずの淫裂が、少し離れていてもはっきりと見

て取れる。糸を引く粘液に塗れた肌はテラテラと濡れ光り、微かに湯気が立ち上るくらい、熱く火照っているのがわかった。

両手の指を這わせて、ぴったりと閉じながらも肉を緩ませた淫唇の縁に添えると、また彼女の腰がヒクンッと切なそうに跳ね震える。その反応と、立ち上る甘酸っぱい牝臭に興奮を煽られながら、彼女の秘唇を大きく割り開かせた。

「はひぃぃっ……んぃっ、はっ……んぁぁぁ……恥ず、かしぃ……っっ」

そんな妹の嬌声には、羞恥だけではないはっきりとした快感が含まれていた。その証拠に、開かれた淫唇の奥は濃桃色に充血してしとどに濡れ、下方でヒクついている小さな穴から、ドロドロと涎のような愛液の滝が溢れこぼれている。

（やべっ、やべぇぇっっ！　これはっ、興奮するっっ……くぅっ！）

映像や雑誌で見たことのある秘部は周囲が黒ずんでいるものも多かったが、これはそんなものとは別格だった。雪を思わせるほど白い肌と、開ききった淫部の薄い桜色の粘膜が、まるで生きている華のように蠢いて甘い香りを放ち、直希の興奮を誘う。

（あ、ダメだ……悪い雪花、俺もう限界っ……）

本能に訴えかける牝の艶めかしさに心が奪われ、理性の糸がプツリと切れる。

――ズチュッッ……ズジュルルルッッ、グジュルッ、ジュブゥゥッ！

「ふぇぇっっ、んひっ、はっ……な、なにっ、いひぃぃんっっ♥」

お尻がバタバタと跳ね上がり、腰をくねらせて、突然の快感に妹が悶え叫ぶ。けれど直

希には、それを気にして淫らなキスを止める余裕なんて、まるでない。
（はぁっ、雪花のマ〇コっ……んぐっ、じゅるっっ、ぐちゅぅ……はぁっ、あぁ……）
唇を濡れそぼった淫部に擦りつけて、上の口へしたような濃厚な口づけを、桃色の粘膜が広がる膣肉へ、そして淫らな愛液を垂れ流す唇の奥へと浴びせかけてゆく。瞬く間に口に溢れる甘酸っぱい、僅かに苦い味と香りをゴクゴクと飲み下し、柔らかく、舌が蕩けるほどに熱くふやけた媚肉を舌で擦り、舐め、縦横無尽に突き回して堪能する。
「んにゃうぅぅんっ、あひっ、ひゃっ……ふやぁぁっ、おにっ、いっ、ひひゃぁっ♥」
膣肉の感触だけでもわかるくらい蕩けきった、甘えるような妹の嬌声に、舌使いはさらに苛烈になってしまう。両腕はお尻ごと腰を抱え、逃げられないくらいに強く顔を股間に押しつけながら、舌先で何度も膣口を抉り、溢れる蜜液を吸い上げて卑猥な音を響かせる。その音に雪花も興奮させられているのか、吸えば吸うほどに愛液が溢れ、むせ返るような牝臭も相まって、彼女に溺れてしまいそうだった。
「はぁっ、あむっ、じゅるるっ、ぐちゅっ、ちゅばぁぁ……れろっ、じゅろぉぉ……」
「んくぅぅっっ!?　ふぁっ、はっ……おにい、ちゃっ……んんぅぅぅ――っっ♥」
ジュポンッと音を立てて舌を引き抜くと同時に、広げた舌腹で膣前庭を舐め上げ、そのまま陰核に舌を絡めてやる。その瞬間――腕の中で彼女の下半身が激しい痙攣を見せ、弾けるような熱い迸りが、押しつけた唇にビチャビチャとぶちまけられた。
（ふわっっ……うっ、ぐっ……これ、もしかして雪花のやつ――イ、イッたのか!?）

信じられないというより、羨ましいという響きを含ませて雪花が呟いた。その頭をクシャッと撫でてやり、直希は答える。
「雪花のも、またもらうからな？」
「ふぇっっ⁉　あっ、う……うん、え、えと……そのうち、ねっ……」
その光景を想像してしまったのか、頭からプシュゥゥッと湯気を噴き上げんばかりに赤くなり、雪花は小さな手でシーツを握り締めていた。
（うぅむ……けど、どうすりゃいいんだ。こっちは俺も初めてなんだが……）
とにかく、まずは少しでも慣らさないといけない。幸いにも潤滑油はたっぷりある。彼女の緩んだ淫唇を濡らす、トロトロの愛液を掬い取って肉棒に擦りつけながら、反対の手で彼女の小さなアナル皺にもじっくりと、念入りに染み込ませてゆく。
「んふぅぅっ……ふぁっ、あぅぅ……んはっ、恥ず、かしっ……いっ、んくぅっ……わたし、こんなぁ……んはぁっ、あっ、あぁぁっ♥」
上半身を倒し、うつ伏せでお尻を突き上げる体勢になった月花が悶える。身を捩るたびにフルフルと尻肉が柔らかく揺れ、その光景に自然と唾が溢れてきた。
「大丈夫か、痛くないか？」
「は、はい……先に綺麗にしておいたおかげで、んっ……たぶん、少しはほぐれているのではないか、と……くふっ、ふぁっ……」
微かに上擦った声をもらす月花の様子に、それならもう少し強くしてみようかと、指先

を軽く捻りながら、腸奥へ埋没させてゆく。
——グリィィッッ、クニュッ、チュブゥゥッ……
「ふやぁぁんっっ♥　んひっ、ひゃっ……しょれっ、とけっ、ひゃうぅっ、に……ひぃんっ！　にいっ、ひゃっ……んぅっ、んふぅうっっ！」
それでも、彼女の言った通り相当ほぐれているのか、痛がるどころか甘い悲鳴を上げ、尻肉をタプンッと大きく震わせる。
（うぉっ、すげぇ反応……もうこれ、いけるんじゃないか？）
指を曲げて軽く菊肉を弄ってやると、思った以上の柔軟さで粘膜襞が絡みつき、菊口もグニグニと伸び縮みしていた。十分だと判断して指を抜くと、吸いついた菊皺が裏返って伸びだし、ひょっとこの口のようにいやらしく吸いついてくる。
「っ……ははっ、すごいぞ月花……これなら初めてでも、お尻で感じられるかもな」
「そっ、そんなこと……兄さん、意地悪ですっ……」
言葉で責めると赤くなった顔をベッドに埋め、月花が身を捩って恥じらいを露わにする。だがすぐに、彼女は震える声で小さく付け加えた。
「と……当然じゃ、ありませんかっ……わたしの身体はどこも、かしこも……兄さんに見られ、触れられたら……はしたなく、悦んでしまうんですからっ……」
「……」
破壊力がさらに一段高い、妹の衝撃告白に、こちらのほうが恥ずかしくて顔が熱くなっ

てしまう。それと同時に、彼女の気持ちが嬉しくてたまらなかった。
「――月花は可愛いなぁ、そんなお前が大好きだぞ」
「ひゃぅうっっ⁉　ひぅっ……に、兄さん……んっっ♥」
甘すぎるかと思う発言だったが、彼女には効果抜群だったようだ。身悶える妹の耳元でささやきながら、固定した肉棒の先を尻谷間に滑らせ、柔肉皺に押しつける。指で少し慣らしただけだったが、彼女の敏感すぎる膣肉と同様に、兄のペニスを敏感に察知して菊皺も唇を緩め、優しい口づけを亀頭に浴びせてきた。
「力抜いて、ゆっくり息吐けよ……じゃないと、耳にキスするからな……」
「んはっ、ふっ、くぅぅんっっ……～～～～～っっ、に、兄さんっ……それ、だめですぅ……んひぅっ！　あっ……ち、力、入っ、ちゃ……ぅっ、はっ、あんっっ♥」
ニュムゥッと菊粘膜が割り開かれ、亀頭の先端を咥え込もうとする。ヌルヌルと腸液で湿った粘膜が擦れ、月花の突き上げられた腰が切なそうにわなないた。
それでもやはり、指とは違う野太い肉棒を押し込もうとすると、ミチミチと軋みを上げて菊肉が窄まり、直希を押し返してくる。
（ちょっと硬いな、やっぱり……あっ、でも気持ちよさそうにはしてるかも……）
背後から彼女の表情を覗き見ると、挿入されるのはキツそうなのだが、肉皺を亀頭で突かれ、捏ねるように擦られると甘い声をもらし、瞳をうっとりと細めている。感じている月花の表情は妙に艶っぽく、それを見ているだけでムラムラと劣情を催してきた。

「……はむっ、んじゅるっっ……」

「んくぅぅぅうっっっ⁉　ひぁっ、ふっ、にゃっ、にをっ……んぁっ、ふやぁぁ……」

柔らかそうな耳朶を甘噛みし、ネットリと唾液を絡め、舌でしゃぶり擦る。同時に両手を胸元に回し、パジャマ越しの乳房に押し当て、遠慮なく揉みしだく。

（うくっ……やっぱ、柔らかいっ……っつーか、またノーブラかっっ……）

普段の就寝前ならしているはずの下着は、直希を誘惑するためか着用していなかった。おかげで布一枚越しという、ほとんどダイレクトな感触で、妹の豊満な柔乳を堪能することができる。指を押し込むと乳肉がたわみ、ニュプニュプと指を包んで形をひしゃげさせた。上体がベッドに倒れ伏している体勢のせいで、十分な愛撫はしてやれないが、それでも月花は気持ちよさそうに声を上擦らせ、腕の中でクッタリと身体を弛緩させてゆく。

「んひゃうぅぅっ、ふぁっ、はぅっ、あぅぅぅっ……にぃ、ひゃぁん……あぅっ、ふぁんっっ♥　む、にぇぇ……んっ、お、おっぱい、いいれすっ……はふんっっ♥」

亀頭の先だけを埋没させていたアナルもかなり抵抗を弱め、僅かに体重をかけると、先ほどよりはスムーズに腰が進んでゆく。

（うっ、おぁっ……すげぇ、こっちもネトネトで……くぅっ！）

亀頭の大きさに菊皺が広がり、咥え込むにつれて腸内からはグプグプッ、ニチュゥゥ……と粘膜の擦れ合う音だけではない、いやらしく水っぽい音までが響いてきた。異物を排泄するための潤滑油なのか、未知の快感を欲する期待の表れなのかはわからないが、亀頭

に絡みつく熱い粘液のとろみを挿入の助けにしつつ、先端だけの抽挿を繰り返してアナル襞を念入りに捏ね回し、直希の感触を馴染ませてやる。

——グジュッ、ジュブッ、チュブゥゥ……グポッ、ヌポォォッ、クチュッ……

「はふっ、あふぅぅんっ……んぁっ、くあぁぁっ……んっ、ふっ、ふぅぅんっ♥」

何度も短い抽挿を繰り返しながら、挿入のときだけは少しだけ深く腰を進める。妹の艶姿に呆れるほど興奮し、限界まで膨張して開ききった肉傘が肉皺に擦れるたび、小さくなった月花が甘く蕩けきった声を上げるのが、耳に心地よくてたまらない。

（可愛い反応するなぁ……っ、しかも、だんだん……水気が増えてっ……）

浅い抽挿だけで、腸奥どころか入口付近くらいしか、菊粘膜への刺激は与えていなかった。それでも腸奥からはトロトロと熱い蜜汁が溢れてくるらしく、腰を引くたびに結合部から滴り落ちて、腰を進めるとプチュプチュッと粘液の噴きだす音が奏でられる。

「ほら、聞こえてるだろ……すごい音だ、気持ちよさそうにしてる……」

「んひぃっっ、あひっ、はいっ、はいぃっっっ♥　いやらしぃっ、はじゅかひぃっ、れひゅぅぅ……んぁぅっ、はっ、はぁっっ……んはぁぁぁ……っ♥」

気がつくと肉皺の緊張はもう相当にほぐれていたらしく、力を込めなくとも逆に向こうから吸いついて、亀頭を丸呑みできるくらいにアナルが広がっていた。腰を進めると亀頭の先が腸壺を押し開き、肉傘が開いた菊道を地均ししてゆく。

「ひゃうぅぅっっっ⁉　んぁっ、に、にい、さっ……あんっ、あぁぁっ！　はひっ、は

ひってぇ……あぁっ、はいってますっ、くぅぅぅんっっ！」

ズブズブッ、ニチュッ、グチュゥゥッと水気たっぷりの粘膜がうねり、膣肉とは異なる弾力を保った刺激でギュゥッと圧迫し、埋没する肉棒を噛み締めてくる。

（うっ、おぉっ……くっ、思ったより、深くまで……入って、るっ……）

ゴムが柔らかく蕩けているような感触が、挿入の圧迫に応じてペニスに吸いつきながら伸び縮みし、粘膜で包み込んだ瞬間から、即座に扱き抜いてくる。ザワザワと快感の渦が下腹部を這い上がり、背筋を震わせて、挿入の刺激に夢中にさせられていた。

「ひぐっ、んぅぅぅ……ど、どう、れふかっ……にぃ、しゃぁん……んぁっ♥」

こちらを振り向く余裕もないくらい、尻肉の内側を捏ねられる感覚に震えながら、顔を伏せた月花が問いかける。その不安そうな声は未知の刺激に怯えているのではなく、ただひたすらに、兄がどう感じているのかを気にしているようだった。

「あぁ、すげぇ、気持ちいいっ……最高だ、月花はお尻も……全部、気持ちいいっ……」

「くふぅぅぅっっ♥　んぅっ、うれっ、嬉しいっ、れしゅっ……んひぃぃぃっっ!!」

背中を丸めて小さくなり、全身を脱力させる彼女にぴったりと身体を重ね、ペニスを根元まで挿入させきってしまう。明らかな違和感がお腹を満たしているせいか、ヒクヒクと月花の全身は震えっぱなしで、アナル皺は限界まで伸びきったまま。パクパクと呼吸するような動きを繰り返し、肉棒の根元を優しく食み撫でていた。

それでいて、亀頭を撫でるS字結腸との繋ぎ目はドロドロの腸汁で潤み、苦しそうな感

覚をまるで訴えずに、むしろ快楽を求めて吸いついてきている。少しでも腰を引けば、肉傘に引っ張られる直腸が蠢いて、逃げようとするペニスを引きとめようとした。やむを得ずまた深く挿入し直すと、ヒクついた菊皺の隙間からプチュゥッと熱々の菊蜜が噴き溢れ、直希の腰と彼女の尻を濡れ汚してゆく。

（……やっぱ、わりと苦しいのかな……ちょっとほかに、気を逸らして……）

そう考え、手の平を押し当てたままの乳房を優しく撫でようとした、刹那――。

「っっ⁉ んぁっ、だめっ、にいひゃっっ……ふぁうぅぅぅぅんっっ♥」

「――えっっ！」

左右から中央へ寄せようと、少し強く圧迫しただけで。

「くぁっ、ひゃっ、やらっっ……あうぅぅんっっ‼ んひっ、はっ、ふやぁぁっっ♥」

ビクビクビクンッッと感極まったように肩を跳ね上げ、月花のしなやかな背が思いきり反り返ってゆく。のしかかっていなければさらに暴れていたのは間違いないと確信するくらい、彼女の全身は弾かれたように痙攣し、開いた股間の真下には甘酸っぱい臭気を放つ牝蜜の滝が、ボチャボチャと滴り流れていた。

（……うおっ、すげぇ反応……まさか、こんなに感じてくれてるなんてっ……）

「んぐっ、ひゅっ……ふにゃぁぁぁ……んだっ、だ、かぁぁ……い、いっひゃら、ない、れしゅかぁ……んぐっ、くふぅぅぅうっっ……」

ゾクンッ、ゾクッと背筋をわななかせ、彼女が涙声で訴える。

「に、にいひゃんに、しゃわ、りゃれ、たらぁ……んっ、か、感じすぎて、おかしくぅっ……んぁっ、なっ、なっひゃう、って……あうっっっ♥」

アナルが強く窄まり、肉棒全体がギチギチと締めつけられる。思わず腰を寄せて、さらに奥に亀頭を擦りつけると、はしたなく腰を振り乱して月花がさらに声を上擦らせた。

「んはっ、らめっ、奥っっ♥　んぅっ、グリグィッ、ひひゃっ、らめれふっっ……ん、ひ、ひきゅっ、ひきゅぅっ……押され、ひゃ、押されちゃうっっ♥　んあぁぁっっ♥」

（ひきゅう？　ひきゅ……地球……あぁぁっっ！　子宮かっっ！）

なにかのエロ本で、腸奥を刺激されると子宮を圧迫され、感じる女性もいると読んだことがあった。そう言われれば、初めてのエッチのときを思い返すと、月花は膣奥を突かれると激しく声を乱し、全身を跳ねさせて感じていたような気もする。

「……ふぅん、そっかそっか。月花はそういうとこが、弱いんだな？」

「ふぇぇ……にい、ひゃん……？　あっ、ひぃっっ⁉　くっ、ふぅぅぅんっっ♥」

胸に添えていた手を肩に回し、彼女を抱き上げるようにしながら自分は腰を押しつける。すぐさまその効果は現れ、菊肉を満たす肉棒がグチュリッと粘膜に包まれると同時に、直腸を強烈に圧迫して、腸壁を挟んだ子宮へ刺激を送り込むことになる。

「んひぃぃぃ――っっっ‼　いあぁっ、ひあぁぁぁんっっ！　にいひゃっ、にいっっ……んはぁぁっっ、あぅっ、はっ、あーっ♥　んぁっ、あふっ、んあぁぁぁっっ♥」

顔を伏せて声を抑えることもできず、はしたなく大口を開けた唇から、感極まった嬌声

が響き渡る。その光景を間近で見つめていた雪花は、ささやくように声をもらした。
「つ、月ちゃん……そん、なにっ……んっ、あっ……んぅぅっ……」
妹の痴態に触発され、身悶えた雪花は直希の精液塗れになった秘部を、自分の指で弄りだす。お尻を犯され喘ぐ妹、それを見て興奮し、自慰に耽りだす妹――二人の可愛い妹の艶姿にペニスが激しく躍動し、月花のお腹の中で暴れるように粘膜襞を刺激する。
――グニュチュゥゥッッ、グリィッ、クチュッッ……グプゥッ、ズニュルゥッ！
「あひっっ、はひぃぃぃっっ⁉ んぁっ、ひゃめっ、あぃっっ……イクッッ、イクイクイクイクぅぅぅっっ♥♥ んぃっ、にいしゃっ、兄さぁぁぁんんっっ♥」
「うぇっ、ちょ、ちょっと待っ、月――ふぐっ、くぉぉぉっっ！」
走り込みで鍛えられた脚がバネのように跳ね上がり、肉棒を甘く締めつけるお尻が高々と突き上げられる。痙攣し、カクカクと腰が振られるたびにペニスは根元から先端まで余すことなく扱かれ、精嚢からせり上がった牡欲が一気に、尿道を駆け上がってゆく。
（ふっ、ぐあっっ……やばいっ、イクッ……イクッ、イクぅぅぅっっ……）
彼女自身も意識していないであろう、直腸粘膜のいやらしい蠢動と、熱々のロウのように蕩けた腸蜜が肉棒に絡みついて、最後の一押しまで与えてきた。
「っっ……あぁぁっっっ、ダメだっ、イクッッ！ 月花っ、イクぞっ……っっ！」
「ひぐぅぅぅっっっ、あぅっっ、あふぅぅぅっっっ！ んぃっっ、いへっっ、きへっっ、にいひゃぁぁんんっっ♥ あんっっ、あひっっ、あひぃぃぃっっっっ♥」

壁の奥にある子宮を意識して先端をゴリゴリと擦りつける、その感触に射精を促された直希は彼女の下半身を抱え込み、ピッタリとお尻に腰を密着させた。

――ゴップゥゥゥッ!! ドブドブドブゥゥッ、ビュルビュククッッ、ビクゥゥッ！

「んきぃぃぃぃ――っっっ♥♥　あひっ、ひぐっ、イグぅぅぅんっっっ♥」

伸びきった手でシーツを握り締める月花の細腰が痙攣し、甘酸っぱい牝臭が全身から溢れてくる。射精の快感に腰が震え、理性を失ったように両手は、彼女の身体中を弄ってしまう。その感触に身悶え喘ぐ妹の姿もまた、さらなる射精を誘っているようだった。

――ドクッドクッッ……ビュルルッ、ビュクッ……ドプゥゥッ！

「んっ、ひっ、あひっっ……ひはぁぁぁぁ……んぁっ、しゅ、ごぉぉ……あ、つい、トロトロ……れひゅ、兄さんの、あっ……ふぁぁぁ……」

止まる気配のない射精の波に身を任せると、腸奥に熱い迸りを受けた妹の下半身が力を失って、ガックリと崩れ落ちてゆく。慌ててしっかりと支え直し、ベッドに横たえてやるも、直希自身が萎えなければ、抜くことさえもできない。

（……うぅっ、なんでだ……暴発みたいになったから、収まりつかないとかそういう……驚きだな、雪花にもあんなに射精したってのに……）

腸内に埋まったままの肉棒がビクビクと跳ねるたび、彼女の腰もわなないて反応を返す。まだするんですか――とでも訴えるように、涙目になって涎で汚れきった、いつもは澄ました顔の妹が振り返る姿に、背筋がゾクゥッと嗜虐欲で満たされた。

「……もう一回、いいか……月花？」
「はふぅっっ……んっ、そ、それはぁ……くぁっ、あぅぅっ、ふあぁぁっっ♥」
返事も待たず双臀を掴んで腰を引くと、猫が伸びをするような体勢で背筋を反らせながら、お尻を突きだした月花が甘く叫ぶ。それを承諾と受け取り、再び直希は腰を揺すって腸奥粘膜を蕩かしながら、壁の向こうへ振動を送り続ける。
「っっ……ほらっ、どうだっ……月花ぁっ！」
「あぐひぃぃぃぃっっっ‼　あひっ、らめっ、らめへぇぇっっっ♥　こはっ、こわれっ、ひゃっ、ひゃふっっ……んぁっ、ふやぁぁぁっっっ！」
力が入っていない彼女の身体は、かなり抽挿が楽になっていた。それに任せて勢いよく腰を振りつつ、へたり込んで自慰に耽っていたもう一人の妹を抱き寄せ、唇を寄せる。
「雪花っ、舌っ……舌だしてっ、こっち……んむっっっ、はむっ、じゅるぅぅ……」
「ふぁうぅぅんっっ♥　あむっ、ぐぢゅっ、ちゅぱぁぁ……おにい、ちゃ……んっ♥」
キスしたままパジャマの裾から手を伸ばし、上の妹の慎ましい乳房を撫でるように刺激する。小さくてもはっきりと感じる膨らみを優しく揉み捏ね、そそり立った乳首の感触を味わいながら、ときどきそれを強く摘んだりし、愛らしい反応を楽しむ余裕もあった。
（はぁっ、あぁぁ……やばい、今日はもう……色々、我慢できないかもっ……）
妹たちの甘い香りに包まれ、理性を大幅に蕩けさせたまま――直希は淫蕩に溺れたように彼女たちを愛し、愛される夜を過ごすこととなった。

そんな余裕はまるで与えられず、凄まじい握力で両肩をガシッと掴まれる。
「兄さん、こちらへ」
傍にあった体育用具倉庫まで引きずられ、中に連れ込まれるや否や、都合よく置かれていたマットの上に押し倒されてしまう。
「わたしだって……わたしだって、したかったのに……迷惑をかけたくないから、我慢してただけでっ……兄さんがその気なら、もう我慢なんて……兄さんっ、兄さぁんっ♥」
（くぉぉっ……なんで、都合よくマットが――とか言ってる場合じゃないかっ……）
超薄着の妹が、くっきりと浮かび上がらせた艶めかしい身体を密着させ、縋りついてきた。腰を抱かれ、ムニュンッと押し潰れた乳房の感触で胸板を撫で回されながら、彼女の温かい唇の湿り気が、首筋から鎖骨にかけて吸いついてくる。
「んちゅぅぅ……れろぉっ、はむんっ……んむちゅ……はぁっ、はぁぁ……兄さん、やっぱり姉さんとしたんですね？　兄さんの匂いだけじゃない、ほかの香りがします……」
「い、いやっ、違うんだよっ！　あ、れは……その、調理実習で作ったって、クッキーもらって……お礼に、洗い物を手伝っただけでっ……」
言い訳がましくそんな説明をしてしまった瞬間、彼女がピクンッと眉根をひそめて顔を上げた。その見開いた瞳に、こんもりと涙が浮かんでゆく。
「兄さんっ……わたしのお弁当より、姉さんのクッキーが……っ、姉さんがっ……姉さんのほうが、お好みなんですか……？」

（あぁぁぁぁっっっ⁉　また余計なことを……学習しろよ、いい加減っっ！）

確かにあんなことを言われれば、雪花のクッキーを食べていて弁当を食べなかったと思われても仕方がない。特にいまのように、月花がこれほど取り乱していては。

不安に押し潰されそうな妹の気持ちを守るため、直希は彼女の身体を抱き寄せた。

「っ……ンなことないっての！　俺は、その……どっちがっていうのは選べないけど、月花のことも大好きなんだよ！　大事に、思ってるつもりだ……」

どちらが好きということを選べないくらい、二人のことが好きなのだ。それをしっかりと伝えるように頭と背中を優しく撫で、耳元にささやきかける。髪に鼻先が埋まり、漂う汗の香りが鼻腔をくすぐって、身体に密着する肉感とともに劣情を大いに刺激された。

（うわ……もう、抱き心地よすぎるっ……しかも月花の汗、なんでこんないい匂いなんだよ……匂いだけで、イケそうなくらいで……）

思わずスンスンと鼻をヒクつかせてしまうと、驚いたように彼女の腰がブルッと大きくわななく。押しつけられる太ももが、その拍子に股間を擦り上げ――。

「んっっ♥　あっ、はぁっ……兄さん、嬉しいです……んっ、ちゅぅ♥」

興奮しきった牡欲が、彼女のお腹を下から突いてしまう。けれど月花は呆れたり怒ったりするどころか、泣き顔をパァッと明るい笑顔に変え、緩めた唇を重ねてきた。

「ふぁっ、はむっ……んれりゅっ、ちゅぶぅ……」

レロッ、チュパァ……と舌が左右に一往復して、甘い唾液が唇に染み込み、それからゆ

っくりと身体が離れてゆく。だがもちろん、それだけで済ますつもりはないらしく、体操着の裾に手をかけると、汗を吸ったシャツをスルスルと胸元までめくり上げた。

（うおわっ……やっぱすげぇ、月花の胸……デカいだけじゃなくて、綺麗だし……）

先ほどから透けていた薄桃色の下着、それもかなり可愛いデザインをチョイスしたのか、カップにつけられたフリルが天使の羽のようだった。そのカップから溢れんばかりの肉感が、柔らかそうに押し合って谷間を作り、微かに動くだけでタユタユと揺れて、直希の目を惹きつけてやまない。

劣情をそそられ食い入るように見つめても、月花は気を悪くしたりはせず、むしろ誇らしいというようにたおやかな笑みを浮かべてみせた。

「うふふ、こちらではまだご奉仕していませんでしたよね？　姉さんにはない、わたしの唯一の武器ですから……どうぞ、心ゆくまで堪能してください」

慈愛に満ちた妹の表情はあまりにも綺麗で、射止められたように鼓動が大きく弾んだ。身体から力が抜け、ダラリと寝転んだままになってしまうと、彼女の手がベルトを外し、ズボンを脱がせてくれる。

「あっ……すごい、兄さんのおちんちん……お、おちんぽの、匂い……んすぅっ、ふぁっ、あはぁぁ……んっ、すんっ、すんすんっ……んっ、ふぁぁぁ♥」

トランクス越しにクンクンと鼻を鳴らされ、臭いのこもった股間を顔で撫で回されるのはかなり恥ずかしかった。羞恥に腰を跳ねさせてもがいていると、妹は直希が奉仕を要求

していると勘違いしたのか、小さく頷いて下着の端を唇で咥える。
「はぁ、あむぅっ……ぬがひまひゅれ、にいひゃん……んっ、んぅぅぅ……」
太ももを抱えられ、少し腰を浮かされたかと思うと、すぐさまトランクスを下ろされた。剥きだしになった性器が引っかかり、弾かれてお腹をベチンと叩く。その勢いのよさと脈動の激しさに瞳を丸くしつつも、嬉しそうに吐息をもらして月花が身体を起こした。
「それでは、兄さん……これより、わたしの胸で精いっぱい奉仕させていただきます」
恥ずかしそうに頬を染めながら三つ指ついて座礼する姿は、彼女の長い黒髪と相まって、まさに大和撫子という雰囲気を醸しだす。
（っっ……やっぱい、めちゃくちゃ綺麗だ……月花……）
このまま押し倒してしまいたいくらいの清楚さ、そして美しさに股間の昂ぶりがまたもビクンッと大きく震える。それを見た妹もクスッと頬を緩め、身を寄せてきた。
「失礼いたします、兄さん……」
「んっ、おっ……くおぉっっ⁉」
体操着で乳房の大半を隠したまま、背に手を回してなにかをパチンと外した月花は、シャツの裾からペニスを、胸の谷間に飲み込ませてゆく。肉棒はとてつもなく柔らかい感触を貫き、肉幹がモチモチの肌に包み込まれて、先端から根元まで優しく扱き抜かれた。
「ふぁっ、くっ……っあっ、はっ……」
「あはぁんっっ♥　はぁっ、兄さんの、熱いのが……んっ、くふぅっ……おっぱいの間に、

グイグイッて押しつけられますぅ……ふぁっ……」
体育の汗で湿った肌が、ほのかな温かさとともにペニスを揉みしだく。さっきのはブラを外していたのか、窮屈さから解放された乳肉はシャツの中でフニュフニュとたわみ、押し潰れて肉棒を刺激していた。
（ふぁうっっ……すっげ、刺激、つよっ……うっ、はぁぁっ！）
月花と視線が交わり、艶めかしい笑みを向けられ、背中が震えた。彼女の両手が乳房を左右から圧迫し、本格的に豊乳で扱き始めようとする。歪んだ柔乳の感触が肉幹に吸いつき、肉傘の裏側がスベスベの肌に撫でられ、それだけで腰が跳ねるほどだった。
「ふぁっ……んぅっ、どう、でしょう……んくっ、あっ……兄さんの、気持ちよくなってますかぁ……んっ、ひゅっ、あんっ……ひっっ……んひぃっ！」
妹の上半身が上下に揺すられ、全体を刺激するように胸が擦れてゆく。強烈な圧迫で精液を吸い上げられるような心地にさせられるのに、さらに乳房を互い違いに滑らせ、左右から異なる感覚を押し広げられていた。彼女自身も感じているらしく、甘い声を上げながら奉仕され、官能は先ほどから昂ぶりっぱなしだった。
「あっ、あぁっ……すっげぇ、気持ちいいっ……」
「ほ、本当ですかぁっ♥　んはぁぁ……嬉しいです、兄さんっ……はぁぁ、んぶっ、れろぉぉぉ……んぐじゅっ、じゅろぉぉ……」
「っっ……っあぁぁっっ！」

柔らかな下乳が腰に密着し、硬く膨らんだ亀頭が完全に乳谷間を貫通して、シャツの胸元に形を浮かび上がらせた。そこに月花の舌が這い、大量の唾液を浴びせられ、舌先で丁寧に裏筋を舐め上げられる。

（うくぁっっ……ふっ、はぁぁ……濡れた生地が、擦れてっ……ぐっっ！）

肉幹を乳房で隙間なく包まれて、ひたすら扱かれていまにも射精してしまいそうなのに、先端まで舌と唇で愛撫され、快感の波が何度も何度も下半身を駆け抜けてゆく。亀頭の先に唇の感触が伝い、チュッチュッと甲高くキスの音が響くのを聞きながら、唾液塗れのシャツが絡みついてくるなんて、まるで経験にない気持ちよさだった。

「あぁぁっっ！　やばいっ、これっ……全部、持ってかれそうっ……」

「はぁぁ、んっ……んはぁぁっ♥　兄さんが、こんなに気持ちよさそうに、声を上げて……っっ♥　兄さんっ、兄さぁんっっ……好きっ、好きですっ、大好きですっっ♥」

本当は直希の唇にしたいのだと言わんばかりに、熱烈なキスが亀頭を舐め回し、舌先が尿口をグリグリと刺激してくる。一瞬にして背筋が震え立ち、無意識にお尻が跳ねて腰を突き上げてしまう。濡れたシャツにペニスを押しつけるような体勢で喘ぐ、どうしようもない恥ずかしい格好だというのに、快感を求めずにはいられない。

「ふっ、あっ……月花っ、月花ぁっ……くっ、うぅっ！」

一方的にされるばかりというのも矜持が許さず、無我夢中で手を伸ばし、直希の指先が体操着に浮き出た小さな突起を軽く摘み上げる。と――。

「んひゃうぅっっっ♥♥　ひあっ、ひゃっ……らめっ、にい、しゃっ……ふぁんっ♥」
開いた唇から大量の唾液を滝のように流し、瞳を快感でトロトロに染め、だらしない笑みを浮かべた月花が喘ぎをもらした。それでもパイズリ奉仕の手は緩まず、直希の指が乳首に擦れる快感を全身でしっかりと受け止め、お尻を突き上げながら舌をくねらせる。
「あひっ、ひあぁぁんっっ！　んにっ、にいしゃんのっ、指ぃ……おっぱい、クニクニってぇっ、してましゅぅぅ……あぅっ、んぐぅぅっ……」
ドロドロになった亀頭を口に含み、顔全体を動かして粘膜塊を舐めつくし、縦横に舌を這わされた。とてもシャツ越しとは思えないような濃厚な快感に、尿口がヒクついて、胸の谷間で肉棒がビクビクと躍っている。
「んぷぁっ、はぷっ、れろぉぉ……んひゅっ♥　はぁぁ……おいひぃ、よぉ……おひんぽ、おいひぃ……んはぁぁっ♥　ちくび、きもちいいのぉっ……んくっ、くぁぁっっ！」
（あぁっ、もうっ……本当、すげぇ変わりようだなっ……）
エッチになると、行為の直前までは残っている楚々とした冷静な姿が失われ、呂律の回らない口調で淫らな言葉も口にする月花の乱れっぷりに、たまらなく興奮を誘われる。
「月花の乳首、もうビンビンだぞ。こうやったら簡単に……ふぅっ、ぐっっ！」
親指と人差し指だけで乳首を摘み、乳肉全体を持ち上げるように、上に向けて引っ張ってやると、突き上がった大きなお尻がフリフリと可愛らしく揺れた。けれど体勢のせいで、それ以上の責めに転じることができず、またも彼女の乳圧の快感にペニスが弄ばれる。

「んはぁぁ……らめぇ、にいひゃんは、おとなしくぅ……ひてて、くだしゃい……んっ、ふぅぅっ♥　あふっ、んじゅるぅっ……れりゅれりゅぅ、ちゅぷぅ……」

（うぉわっっ⁉　うぐっ、や、っべぇ……っあぁっ！）

乳房の弾力が肉棒を挟んで押し捏ね合い、棒で火を起こすような動きまで加わって、ペニスが根元から先端まで激しく搾り上げられる。キュゥッとお尻の穴が窄まり、痺れるような快感が精嚢を押し上げ、射精を導く鋭い刺激に腰がガクガクと躍ってしまう。

「っっ……っ、月花っ、ストップ！　出るっ、このままだと、汚しちまうからっ……」

「はぷっ……んむぅぅ、じゅろぉぉぉっ……んぷぁっ♥　はい、いいれふよぉ……いくらでも、お射精ください……くひでも、顔れもぉ……体操着でもっ♥　わらひの、すべてをぉ……にぃしゃんの、ザーメンで……ドロドロに染めてくださいっ♥」

（だ、からっっ……どこで覚えてくんだよっ、そういう単語はっっ！）

清楚な顔を淫らに崩しまくって、だらしなく開いた口から舌が伸び、劣情を誘うように亀頭の上でくねる。そのまま彼女は上半身に体重をかけ、自分の胸と直希の腰で乳房をブニュゥゥッと押し潰し、さらに両手でフォローして、ペニスを完璧に包み込んだ。

「お願いっ、ひまふぅっ……にいひゃんっ、しぇーえきぃ、いっぱぁいっっ♥」

「あぐっっ、くっっ……くぁぁぁっっっ‼」

先走りと唾液でドロドロになった状態で圧迫され、小刻みな振動を加えて彼女の温かい肌で擦られると、もはやこらえようもなかった。

――グプゥッッ、ビュクビュクビュクッッ、ビクンッッ！　ドビュルッ、ビュクゥッ！
「くあぁぁんんっっ♥♥　あむっ、んぶっ、ふみゅぅっ……んぐっ、じゅるぅ……」
体操着を貫通するかと思うほどの勢いで精液が噴き上がり、ぴったりと口づけた月花の唇に、粘っこい白濁液がビチャビチャとまとわりつくのが見える。ジンとした熱さが唇から伝わり、その心地よさがさらに精液を搾り、吸い上げるような感覚だった。
「ふぁっ、あっ、つ……月花っ、うっ……いぃっ、もっと、吸って……」
「んひゅっ、はいっ……あむっ、んじゅぅぅぅっ……れろっ、ちゅぼぉぉ……」
亀頭が半ばほど口に含まれ、舌を張りつけたまま、窄められた唇が精液を吸い上げる。思わず彼女の頭に手をやって押さえつけても、彼女はむせることなく肉棒を咥え込んで、喉を鳴らしながら嬉しそうに鼻を鳴らしていた。
（くぁっ……やっぱ、エロいっ……）
「んっ、んぅぅぅっ……んーっ、んふっ……んじゅっ……ぷぁぁ……あはぁぁ……♥」
十数秒ほどに及ぶ吸引奉仕の末、ようやく妹が唇を離す。こってり濃厚な唾液と精液のドロドロ混合液が、口内から亀頭にかけて粘糸を引き、体操着の胸元にいやらしくテカった汚れを広げてゆく。半開きの唇から覗く初々しい桃色の粘膜には、白く濁った大粒の泡がいくつも膨らんで、プクッ、ピチャッ、ニチャァァ……と、まとわりつくような淫らな水音が響いていた。
「はぁっ、はぁ……はぁぁ……んっ、んぐっ……ごくぅ……ふぁぁっ、にいひゃんの、精

液の……すっごく濃い匂いと味が、染み込んできまふ……っ♥」
「……っ」
コンデンスミルクでも啜り上げたかのような口元の汚れを見ると、綺麗なものを汚してしまった背徳感を覚え、凄まじい快感が込み上げた。
（……とはいえ、これ以上はキツいな……ふぅ……）
昨夜の二人との交わりで、正確には覚えていないが五、六回くらいは射精したはずだ。それだけでも疲労困憊なのに、昼休みに二回――そう、あのあともう一回射精してしまったので、二回――したから、これで三回目。それなのにまだこれだけの吐精をしてしまう辺り、我ながら呆れかえるほどの精力だと感嘆させられる。
だが、さすがにもう限界だ。いまだ少し硬さを保ってはいるが、勃起しているだけでもかなりペニスが痛いし、そろそろ引き上げないと授業が終わってしまう。
「大丈夫か、月花……ほら、そろそろ――」
下半身にもたれかかっている妹を起こそうと、肩を揺すって声をかける。けれどいまだ彼女の瞳はトロンと熱っぽく潤み、身体中が熱く火照っているのがわかった。
（……あれ、なんだろ……すっげぇやばい予感が）
ゾクッと背筋に悪寒が走ったのと同時、溢れた精液をローションのようにして擦りつけていた乳肉が、根元から肉棒を刺激してくる。
「ふぉうっっ……つ、月花っ？」

「うふふっ、可愛いお声ですね、兄さん……んっ、はぁっ……また、硬ぁく……」
ヌルヌルした柔らかい肌にくすぐられ肉幹が、そして亀頭の先が乳房の間に引っ張り込まれる。月花が上半身を起こすにつれ、膣から引き抜くような感覚で肉傘が肌に引っかかり、ニュプゥゥ……と音を響かせてペニスがゆっくりと解放された。
抜け落ちた肉棒は粘液に塗れ、温かな湯気を立てたまま、またもいきり立っている。
「はぁ……やっぱり兄さんのおちんちん、逞しくて素敵です……んちゅ、れろぉぉ……はぷぅっ、じゅるぉ……んむぅっ、ちゅぱ……」
「くぁうっっ！　はっ、あぁ……」
イッたばかりで敏感な性器を舐め清められ、切ない呻きをもらしてしまう。けれど月花も、直希を困らせようとする意図があったわけではないらしく、全体を綺麗に掃除し終えると、唾液糸を垂らしながらも顔を遠ざけていった。
「んぱぁっ……綺麗になりましたよ、兄さん？　それでは……」
「あぁ、戻ろうか……えっ？」
身体を起こそうとしたが、ズシリとのしかかった脚への重みが消えない。というか、彼女が短パンを下ろしてショーツをずらし、その隙間からペニスを狙おうとしている、まさにその最中だった。
「ちょっっ……ちょっと待てぇっ！　さすがにマズいだろっ、そろそろ授業終わるし……お前が戻らないと、誰かが捜しに来るかもしれないし！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！　「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！　携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！